



タイトル 中国人韓国人にはなぜ「心」がないのか
著者 加瀬 英明 (かせ ひであき)
出版社 KK ベストセラーズ ベスト新書
発売日 2014年5月20日
ページ数 222ページ

著者の父親は英米派の外交官であったが、漢籍が教養の根幹になっていたため中国を「聖賢の国」として憧れていたようだ。それに反し、著者は父の世代とは異なり、中国を素直な目で見ることができたという。外交評論家で、従妹にジョン・レノンの妻オノ・ヨーコがいる。

『中国と韓国には「心」がない。中国という巨大な妖怪が、アジアに恐ろしい、不気味な暗い影を投げかけている。中国が日本を呑みこもうとしている。韓国が中国の尻馬に乗って、日本を振り伏せようとしている』というおどろおどろしい言葉で本書は始まる。

しかし、中国さえ理解すれば、韓国は属国として、ずっと中国の猿真似をひたすらしてきたので、付録のような民族だと思えば良いと著者はいう。

イスラム版中華思想

ヨーロッパのキリスト教圏と、中東のイスラム圏の歴史を遡ると、イスラム世界の方が、長期間にわたって、キリスト教世界よりも遙かに先を進んでいた。

イスラム文明が黄金時代には、航海術をとっても、医学、数学、天文学、法学、文芸、哲学をとっても、すべてイスラム圏の方が上にあった。

その間、ヨーロッパのキリスト教世界は、聖書に書かれたキリスト教の教えだけが真実であって、それに反する学説は全て異端とされた。そのために、あらゆる面において停滞した。

ローマ法王が、絶大な権威を持ち、キリスト教の原理的な教義を押し付けて、ヨーロッパにおける一切の学問の進歩が停滞していた。ヨーロッパは暗黒時代であり、教義に外れる者は迫害され、投獄されるか、殺された。

時と共に、イスラム世界の進んだ学問が、イスラム教徒が支配していたイベリア半島や、

イタリア半島のすぐ側のシシリア島から、徐々にヨーロッパへと浸透して行って、ルネッサンス（文芸復興）をもたらした。これにより、ヨーロッパに学問の自由が甦った。

1517年に、ルネッサンスにとって、中核的な出来事が起こる。この年、ドイツの宗教学者マルチン・ルターが、ドイツ中北部のウィッテンベルグ城の教会の厚い扉に、ローマ法王に反抗する宣言文を打ち付けた。これが、プロテスタントの出発点となった。

この年を、境にしてヨーロッパが暗黒の時代から、光明の時代へ移っていく。またこの年に、イスラムのトルコ軍とアラブ・イスラム連合軍のアレッポの戦いでアラブ連合軍が敗れた。この戦いで、トルコ帝国が北アフリカに至るまで、広大なイスラム圏に君臨した。

トルコが全イスラム世界を支配すると同時に、イスラム文明の栄華の時代は終わり、イスラム圏が光明の時代から暗黒の時代に移る。それと同時にヨーロッパでは、暗黒の時代から光明の時代に入っていく。

今日でも、イスラム教徒たちは、かつてヨーロッパのキリスト教世界が、自分達よりもはるかに遅れていて、自分たちが未開なキリスト教圏に、科学から文芸まですべて教えてやったという時代を覚えている。そこで、ヨーロッパの人々に抜きがたい「優越感」を持っているのだが、同時に癒しがたい「劣等感」も併せ持っている。

中東のイスラム圏の人々は、気が付いてみると、長い間にわたって遅れていたと思っていたキリスト教世界に、取り返しのつかないような大きな差を付けられていることに気付く。それに加えて、イスラム教が世界で最も優れていて、全世界をイスラムのもとに置くべきだというイスラム版の中華思想がある。中国と同じような傲りがあったので、傷が一層深いものになっている。

ところが、イスラム圏の人々は、キリスト教世界が、どうして長足の発展を遂げることが出来たのか、西洋の良いところや、長所を見ることを拒んで、「彼等は好血だから、狡猾だから、我々を追い抜いたのだ」といった説明しかしない。イスラムの人々は、気位が高く、イスラムが世界一の信仰であると、信じて疑わないから、現実を直視することが出来ないのである。

この辺の事情は、以前から理解はしていたが、これと同じアナロジーが日本と中韓の間にも言えるということに筆者は気付かなかった。続けてみよう。

中国人は、日本について、日本の良いところを決して見ようとしなない。日本が和を重んじ、秩序ある社会を営んで、地道な努力をしてきたために、力を得たことを認めようとしなない。中国と韓国は、酷政が行われていたために、社会が疲弊しきっていたので、19世紀後半に入ってから、近代化する力が全くなかった。自業自得であるのに、反省しようとしなない。中韓両国は、自分達よりはるかに遅れて、未開だった日本に進んだ文物を教えてやったという、いまだに抜きがたい優越感に浸っている。

一方で、日本に先を越されてしまったため、癒しがたい劣等感に苛まれている。日本人にやられるなんて、あってはならないことだと中韓は考える。

イスラム圏とキリスト教圏の不毛の対立は、日中関係にそのまま当てはめることが出来

る。中韓両国のヒステリックな日本を憎む言動や、反日行動はキリスト教圏に対するイスラム過激派を思わせる。

以下、知識としてはっきり理解しておきたいことを幾つか挙げておこう。

今も有効な「日中記者交換協定」

2012年、ロンドンタイムズ紙が、中国トップの12の不動産会社が、党最高幹部の子弟によって支配されていると報じた。この記事によれば、巨額の利益を生む、有料道路のオーナーの85%も、高官の子弟だったという。そして、2010年、中国で約16億円の年収があった3220人の内91%が党幹部の子弟だった。中華人民共和国は人民の国とはほど遠く、巨大な同族会社となっており、収賄、横領などの腐敗が日常茶飯事になっている。歴代のどの王朝も常に人民を食い物にしているわけである。

しかし、日本国民は、中国におけるこのような恐ろしい現実を知りようがなかった。日本の新聞が国民に目隠ししてきたからである。

なぜ、日本の新聞によって知ることが出来なかったかという、日本の新聞社とテレビ局は1964年に、中国と「日中記者交換協定」を結んでいた。

日本の主要なマス・メディアは、この協定を結ぶことによって、「1. 日本政府は、中国を敵視してはならない。2. 米国に追従して2つの中国（中国と台湾）を作る陰謀を弄しない。3. 中日両国関係が正常化の方向に発展するのを妨げない。中国政府に不利な言動を行わない」ことを誓約していた。

日本の新聞、テレビ各社が進んで報道の自由を否定して、外国に奉仕することを約束することによって国民の負託を裏切ったわけである。今日まで、日中関係を大きく歪め、中国を増長させた大きな責任は大手マスコミにある。残念ながら、この「日中記者交換協定」は、今日でも有効だという。

共産中国は、誕生した時から、自由も法の支配もない人治国家だった。もし、日本国民が上辺だけでなく、民主主義を誇っているのであれば、民主主義や法による支配と相容れようがない中国を警戒すべきだった。



「日本軍と戦わずに、米国に開放して貰った韓国。蒋介石の軍隊が日本軍と戦っている間に山に逃げ込み、戦後、蒋介石軍を追い出して独立し、国連常任理事国にまでなった中国」が束になるのも、「日本に戦勝したという偽歴史」なしには自国の物語が語れないからである。すなわち、中国にとって歴史はプロパガンダ、韓国にとってはファンタジーなのである。彼らは、科学的歴史観などないから、明確な意図を持って歴史を平気で捏造する。

天安門事件

いま、中国は1989年の天安門事件以来の大きな危機に直面している。当時、中国は革命の崖っ縁まで追い詰められた。鄧小平が北京の中心で、大虐殺を行う非情な決断をしたこ

とによって、独裁体制を辛うじて守ることができた。中国政府の発表では、天安門事件で、300人ほどの死者が出たということだったが、実際はその10倍はあったと言われている。

中国政府は、その後も、天安門事件の過ちを少しも認めようとせず、歴史から抹殺しようと躍起になっている。



昔は、中国が嫌がる様な行事案内を広報で出せば、瞬間湯沸かし器のごとく中国が怒鳴り込んできたものだ。しかし、この種の広報は、最近のインターネットでは良く見かけるようになった。

例えば、こんなふうにも！

『6・4「天安門事件25周年 東京集会」のお知らせ

この集会は世界でもめずらしい日本人の保守陣営が中国の民主活動家、亡命作家、そして中国の抑圧される少数民族団体と連携し、さらに領海問題で中国に侵略されているベトナム、フィリピンの代表らをまねいての画期的なイベントになります。

当日は「天安門事件25周年」のバッジを頒布します。また石平、黄文雄、陳破空、宮崎正弘らの中国批判書籍頒布会もあります

あの衝撃の天安門事件〔1989年6月4日〕から四半世紀。ことしは世界各地で中国共産党の凶暴な独裁政治を糾弾し、中国に「自由・民主・法治・人権」をもとめる集会が開催され、東京では各派が大同団結、世界でもユニークな集いになります。どなたでも参加できます。

記

.....

プログラム 天安門事件のフィルム上映

開会の辞（水島総）、犠牲者に黙祷（司会 古川郁絵）

基調講演 石平「私は天安門事件で中国を捨てた」

ゲスト 陳破空（在米、亡命作家。通訳があります）

..... 』

慰安婦問題

いま、日本は性奴隷という慰安婦問題によって、韓国によって攻め立てられて、アメリカだけでなく、世界から不名誉きわまりない汚名を着せられている。

この原因は、1993年、河野洋平官房長官(当時)が、慰安婦について、韓国政府から「もし、日本が謝罪すれば、慰安婦問題を二度と持ち出さない」といって、要請されたのに応じて、「それならば」と言って謝罪する談話を発表したことから、発している。

もちろん、慰安婦は、全員がすでに慰安婦だった女性や朝鮮人の売春業者や、親によって業者に売られた娘で、拉致されたとか、強制されて慰安婦にされたというのは事実無根だ。もちろん、韓国は河野談話が発表されると、日本政府との約束など守らず、鬼の首を取ったように日本に手向かう武器として使った。

旧軍の慰安婦は拉致されて強制されたのではなく、職業的な売春婦だった。慰安婦に火をつけたのは日本の新聞だった。1992年、日本の新聞がソウルに元「朝鮮人従軍慰安婦」

が住んでいるが、日本軍によって連行されて、無理矢理慰安婦にさせられたと証言したと、報じたのがきっかけとなった。



日本の新聞とは朝日新聞のことで、朝日の植村隆記者は韓国人の妻とその親と共謀して描いた挺身隊＝慰安婦＝強制連行の図式を社説でも天声人語でも取り上げて広めた。捏造記事で反日感情を掻き立て、日本政府に謝罪を迫った。

日本のお粗末な新聞は、彼らはそもそも、自分たちが日本という国家から「安全保障サービス」を供給されていることを理解していない。日々の「(自分の家族も含めた)暮らし」が、国家が提供する様々なサービスの上でしか成り立たないという事実を失念している。すなわち、彼等には「国家観」が無い。

だからこそ、「自分を含む日本国民の安全が脅かされている」状況にありながら、他人事のような記事を平気で書き、しかも近隣諸国には自分達自身が捏造した記事を書いて送り、さも国が発信したように、ご注進に及ぶ。俗にいう「売国」である。それにしても、日本国内のリベラルと言われている連中の背信ぶりにはうんざりする。日本のお粗末な新聞は、中国や朝鮮、北朝鮮などの外部の脅威勢力が日本の安全保障を弱めようとする基本構図には全く触れないで、日本政府を日本国民の敵のように位置づける。

彼らが持っている「国家イコール悪」という思想は、我々の日常生活を保障する秩序の維持が、国家という統治形態によってこそなされているのだという事実を忘れている。

彼等は、国家というものの存在意義や歴史的意味が分かっているために、正義のよりどころをただひたすら「反国家」に求める。公共精神のかけらもない幼稚な連中だが、そういう幼稚な議論が結構通ってしまうところが日本の情けないところである。どうも、日本人の平均的な感覚には政治に対する切実感や理性的な判断力というものが伝統的に不足している。

日本でも、中国でも、ヨーロッパ、アメリカでも、売春は公認されていた。アメリカ兵が、ベトナム戦争中に百万人以上の「アメラジアン」と呼ばれる混血児をベトナムに残したため、1982年にアメリカ議会が救済する立法を行っている。韓国軍も、ベトナム戦争に参戦したが、3万人の「ライダイハン」という混血児を残した。これに対し、韓国は何の手も打っていない。

だが、前大戦中に、日本兵が生ませた混血児は、中国大陸から、アジア太平洋地域にわたって、ほとんどいない。

しかし、その後も歴代内閣が河野談話を撤回していないために、病根が世界にわたって、日ごとに深まるようになっている。



2014年4月24、25日来日したオバマ大統領がその後韓国を訪問した。韓国でのオバマ大統領の慰安婦発言に、日本のメディアは日本がネガティブに捉えられる部分だけを強調して報道した。少なくともテレビではそう報道された。後で、インターネットを覗いてびっくりした。オバマ大統領はこういったのである。「Those women were violated in ways that, even in the midst of war, was shocking. And they deserve to be heard; they deserve to be respected; and **there should be an accurate and clear account of what happened**」。 どうです、日本のメディアは前半のみを報道し、後半の「何が起

こったか正確に明らかにすべきだ」の部分を故意に無視している。河野談話の検証を促したわけだから、このオバマ発言に日韓が応えるためには、河野談話の検証が必要であるということで、将来的には、河野談話の撤廃も視野に入ってきたのではないだろうか？

面白いところでは、日本で発明されたルビ

ルビと言われる振り仮名は、世界の中でも、日本にしかない知恵だ。他のどこの国にもない。ルビは日本が発明したものだが便利である。著者は中学の国語の先生から「傍^{わき}に立ってくれている教師だと思いなさい」と教えられたそうだ。

漢字は、もともと表意文字であるのに、この振り仮名のおかげで、表音文字にいつそう近くなった。

ルビは便利なもので、鳩山由紀夫と書いて、鳩山^{うちゅうじん}由紀夫、あるいは鳩山^{ルビ}由紀夫、などのようにルビを振ることが出来る。別離、独白に、別離^{わかかれ}、独白^{ひとりごと}と振っても良い。ルビは堅苦しい漢語を、平易な、情感のこもった大和言葉に言い直してくれる。小学校では、低学年の国語の教育にも使えそうだ。

本書を読んで、私たちは長い間にわたって、中国人も日本人と変わらないから、心を通わせることが出来るに違いないと勘違いをしてきた。

日本と中韓二つの国は、隣国であるというのにこれほどまでに文化と国柄が大きく違っている例は世界のどこにもない。人々の思考形式、価値観、行動様式も全く違っている。

「平気で嘘をつき、事実を歪曲する。恥じることなく人を騙す」中韓両国人と、「和の心を持ち、他人の気持ちを慮る利他的」日本人。その様子は本書からしっかり読み取れるので、「中国や朝鮮の人達が何故現在のような行動を取るのか理解できない」という人は是非読んで欲しい。

英紙エコノミストが発表する「世界平和度指数」というのがある。144 か国について 24 項目の「平和への貢献度」を調査したもので、その最新版である 2007 年から 2013 年のランキングでは日本が 6 位なのに対して、中国は 101 位であった。また、読売新聞 (2014. 4. 19) では、外務省が ASEAN 諸国で「最も信頼できる国」を調査したところ、日本が 33% で首位、米国が 16% で 2 位となったが、中国は 5%、韓国は 2% だったという。

日本は良い国だ。これだけの経済大国になったにも関わらず、まだ、人の心は優しく、人口の密集地でも清潔で、駅裏に麻薬患者やアルコール依存症の人達がたむろしているわけでもない。勿論、暴動も起きない、日本は、奇跡のような国である。

中国は、自分が弱い立場にある時、徹底的に「嘘」を周辺に言いふらして時を稼ぐという戦略を用いる。日本は、中国が我が国を批判するたびに、これまでのように遠慮せずに「お金もなく、信用もなく、助けてくれる友好国もなく、あるのは回復不能な大気汚染だけ」の中国の世界観と政策の弱点を攻撃すればよいのである。

2014. 5. 28